

2012/11/10 岡田斗司夫さんワークショップ

「岡田斗司夫と、これからの豊かさを考える。」議事録

M12UB551 渡辺祐

岡田氏は、大学の話を中心に話を進められた。

岡田氏は、現在の大学の問題点として「巨大である」「無駄が多い」。それ以外に「有害である」と指摘。以下要約。

大学があるだけで利益があった時代もあるが、今は大学というものが存在するから社会の中によくないことが起こっている。

日本の学生は高校生ぐらいまでは比較的真面目であり、不真面目な人もいることはいるがたいていの人は毎日学校には来る。毎日学校には来て、理由もわからずとも先生の言うことを聞いて、1時間だったら1時間の授業中座っていて、終わったら帰るとい生活生活を繰り返している。

これが何を意味するか。これは、元々は工業社会を前提にした「人」というのを「人材」にするための仕組みである。学校教育というもの自体が教養を与えるという表の目的と、人間を人材化するという裏の目的がある。「表と裏」って言っちゃうと何かまるで人材化するというのが汚いことに思えるがそうではない。

明治時代以前の農耕社会の日本は、朝起きたら働き出して、その日の働きが終わったらおのおの家へ帰るとい、大変時間的にルーズな社会だった。これが明治以降、大量生産の工業社会になると朝同じ時間に全員が同じ場所に出勤して、同じ服を着て、同じ作業をするっていう大量生産、工業社会の中の一員にならなければいけなくなった。

そうすると「人」では駄目で「人材」にならなければならない。「人」が「人材」になるためには読み書き算数程度はできなくてはならず、また基本的な合理的思考も身につけていなければならない。さらには会計計算みたいなものもできなければならず、また料理や工作も覚えた方がよい。これは、どれも「人材」になるために必要なことである。

私たちの教育システムは、人間の知的好奇心や学びを伸ばすという一面があるが、それと同じぐらい重要なものとして1人の人間、いわゆる西洋人が考える野蛮な状態から文明人の状態に持っていく仕組みとしての一面がある。朝起きたらちゃんと働きに行って、夜帰って来て寝るとい規則正しい生活を続ける「人材」にするための仕組みで、そうやって高校生までかけて一応子どもを「人材」に近いところまで持っていった、その先に大学という場所がある。

これには賛否両論あり、「子どもをもっと自由にさせるべきだ」とい意見も

あるかと思う。豊かな社会であれば子どもをもっと自由にさせても構わないという話にもなるが、いわゆる「底辺校」に近いところでは、大学というものが有害になりつつある。

その有害とは何か。高校まではきちんと学校に行っていた生徒が、大学に行くとしても授業を取らなければ得だというふうになる。授業に出なくてもレポートさえ出せば単位がもらえる、そんなクラスがあればそこに参加して単位をもらうようになる。授業中でもとりあえず先生の監視がなければこっそり出て行って外で友人と喋るようになる、ということ。

確かに高校でもこのようなところはあるが、それはかなりの底辺高校でない。でも日本の大学では東京大学、京都大学、大阪大学をはじめとしてどんな頂点の大学であっても学生たちの大半はこのように少しでも授業を取らない方が得だ、そしてちょっとでも興味がない授業であれば脱け出して外で友達と喋ることがまるで経済的に正しいかのように振舞う。

その結果、「人材」というものがボロボロになってしまう。それまで苦勞して育成してきた、言っちゃえば朝時間通りに起きて夕方まで学校にいて帰ってきたら自分の休みになるという、ある程度の規則性を持った「人材」としての育成を作ってきた状態が、大学に行くことによって駄目になってしまう。

だから結局大企業にしても、中小企業にしても、企業が学生を採用する時には、まずその人物が「人材」としてまだものになっているのかどうか、朝起きられるのかどうか、約束したことが守れるのかどうか、そんなことからチェックしなければいけなくなってしまう。ほとんどの人間が大学に行くようになってしまった今、高校まででせっかく「人」を「人材」にしたのに、もう1度駄目にする。このような機能を現に大学は持っていてしまっている。

大学は巨大過ぎる。無駄過ぎる。有害である。

大学は、ある種良いものではあるが、ありすぎると社会悪になってしまう。例えば1万人の国家があったとして、その国民のうち5000人が大学に行くようになれば大学に価値があると言えるだろうか。かつて日本は、1万人のうち100人程度しか大学に行くことができなかつたため、大きな価値を持っていた。

大学のレベルが低かろうが高かろうが、学問的な研究をやってようがやっけていまいが、出てくる学生が役に立っていれば社会はそれなりに動くが、そんなことと関係なくダメ人間をどんどん養成している。高い学費を払わせ、例えば「枕草子」に莫大な研究費を投じている。果たしてそれに意義があるだろうか。枕草子の研究をあと1万年続けるような組織ってのはハコモノ行政である。「大衆知識社会」を生み出し、国にとって良くない。

これからの豊かさを考えるとき、現状よりも貧しくなることを恐れてはなら

ないということがポイントとなる。実は、金持ちになろうとする努力の方が金がかかる。大学は有害だという理屈と同じで、金持ちになろうという発想は有害とまでは言わないが利得率が悪い。世の中の努力している人たちの大半は、お金持ちになろうとして支払っているものの方が結果として得るものより絶対に多めに支払っている。しかし、昨今格差社会が叫ばれるが、中流階級しか日本にはいない。なぜなら日本では最貧民であってもスマートフォンやネットを持ったり使ったりすることができる。

これからの豊かさとは、「ゆっくりと景気が悪くなり仕事なくなるが、不安に思わないようにする。」ことから始めてはどうか。